

氏名(本籍)	蔡亦竹(台湾)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第2636号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	八家将から見る台客文化 —台湾での中華文化の葛藤—
主査	筑波大学教授 博士(文学) 古家信平
副査	筑波大学教授 博士(文学) 徳丸垂木
副査	筑波大学教授 博士(文学) 丸山宏
副査	筑波大学教授 博士(文学) 松本浩一

論文の内容の要旨

本論文は、台湾中南部地域において本省人が保持している文化を台客文化と規定し、廟の祭礼に登場する八家将という芸能を具体的に取り上げて検討し、台湾の歴史的背景をふまえてその性格を明らかにするものである。

序章では1940年代末から中国大陸の国民党政権が移動したことにより、それ以前から台湾に居住していた本省人と外来の外省人という二つのグループが形成されたこと、そしてこのことが台湾の文化を論じるうえで看過できない影響を及ぼしていることを述べる。本省人は400年以上前からの大陸からの移民を母体としており、日清戦争以後は日本の政治、経済、文化の影響を受け、50年間にわたり大陸との交流が制限されていたこともあり、大陸と性格の違う文化を形成していた。外省人は文化的には出自を同じくしながら、政治的には支配層として本省人に対峙し、さまざまな面で本省人との間に格差が生まれていった。その状況を4つの世代に区分して考察することによって、これまでの研究では曖昧であった台客層を具体的に把握し、台客層が用いている言語に注意を払い、民俗語彙を活用しながら台客文化の性格を明らかにする、と述べる。

第1章「中華文化と台客第一世代の形成」では、中国大陸から台湾への移民が持ちこんだ中華文化は、時間の経過とともに土着化し、次の移民によってもたらされる中華文化によって圧迫されるという歴史が繰り返されてきたことを述べる。そして、本論文で検討する1940年代以降においては、それまで日本の政治、経済、文化の影響下にあった人々が、国民党政府の下でさまざまな圧迫をこうむることになり、今日の台客層の底流が形成される。最近まで実態が伏せられていた2・28事件、その後長年にわたって続けられた本省人の指導者層の排除によって国民党政府の党国体制が確立し、ヘゲモニー（文化覇権）が構築されていったことをまとめる。そうした時期に影響を強く受けた本省人を台客第一世代とし、具体的には一人の農民と政治犯として長年監禁された人物を取り上げ、インタビューの成果を示しながらその実態を明らかにする。

第2章「台客第二世代の社会—50～80年代」では、党国体制が確立し、その下で初等教育を受け育っていった人々を台客第二世代とし、彼らを取り巻く政治、経済、文化を検証する。党国体制が強化されることにより、公務員の採用に外省人が優先され、コメの価格操作や土地政策により本省人の経済力が抑制され、教育面では中国語教員を大量に増やし、教科書では統治者を神格化し、マスコミは党の監視下に置かれた。これ

により本省人の社会的地位は低下するが、第二世代は上部層と下部層に二分される。上部層は国民党政府の施策に反発しつつもそれを受け入れ、中華文化への接近を図り、第一世代の生活様式からは決別し、下部層は第一世代の民俗的世界を受け継ぎ、インフォーマルセクター（非公式部門）との関係を強め、それを生活の糧としていくようになる。

第3章「陣頭としての八家将の機能」では、台客文化の具体例として八家将を取り上げ、その信仰へのかわりについて彼らの活動の拠点である廟の状況とともにとらえる。廟には祭神の勧請による関係や相互の廟の理事による個人的関係などからの付き合いがあり、廟同士の交陪境と呼ばれる信仰圏が作られている。廟は祭礼を盛り上げるように陣頭と呼ばれる民俗芸能団体を擁しており、その一つとして八家将の特性が検討される。その成員たちはインフォーマルセクターと密接な関係を持ち、陰の神々の部下として振る舞うことから神秘性を帯びるとともに、暴力性をも求められることを、他の陣頭である宋江陣、北管、孝女白琴などと比較しつつ明らかにした。さらに、陰の神々と関連する地獄の観念について廟で頒布される善書やシャーマンが行う儀礼を検討して、八家将の信仰上の役割が冥界の中の平民区の治安維持にあり、そうした観念の表出として祭礼で演舞することが期待されていることを明らかにした。

第4章「八家将の実態」では、台北の萬華青山宮、台南佳里の三五甲の廟に所属する八家将、台東と嘉義の大学で結成された八家将を検討する。青山宮の八家将は第3章であげた八家将の特性をすべて備えており、成員は台湾語で chit tou ran すなわち遊び人であり、神の部下になってその加護によって強運を授かることをめざしている。先行研究のいくつかでは、呪術的側面が強調され、そのことが演舞する者にも浸透しているとされてきたが、個々の演舞者は全く理解しておらず、廟の理事クラスの人々が陣頭の権威づけのためにそうした説明を加えていること、調査する側が中国語に依拠したために現地の台湾語の意味を十分に把握できていないといった問題点が指摘される。大学のサークル活動で行われる八家将では、台客第二世代の上部層の流れをひく学生の事例では、もはや頭で理解することしかできなくなった台客文化を体験する貴重な機会と位置付けられる。一方、第二世代の下部層の流れをひく学生たちで構成される八家将では、活動を指導する廟の関係者とも円滑な関係が作られ、陣頭の継承が期待されるまでになっている。

第5章「八家将の現状および台客第三世代」では、第4章で述べた学生サークルの八家将の事例の検討をさらに深め、第二世代の上部層の流れをひき外省人に同化して社会的な成功をおさめたロックシンガーの事例が検討される。彼は本省人としてのアイデンティティ（台湾意識）を抱くようになった時を「覚醒」ととらえ、音楽表現の中に意図的に八家将のモチーフを導入し、演奏中に金紙（あの世に送る金）を撒くというパフォーマンスを行う。しかし、彼は八家将団体との付き合いは全くなく、実際に演舞する人々の好みや気性もよく分からない。この事例に典型的に表れているように、中華文化への接近が一段と強くなった台客第三世代になると第二世代に見られた二分化が一層進んで、上部層からはたとえ台客文化に「憧れ」を抱いたとしても、探求しなければその内実は分からなくなっている。

結語「台客、八家将から見る台湾民俗研究への新しい視角」では、これまでの議論をふまえて今日の八家将が反社会的勢力の温床であるとか、多くの非行少年が帰属するといった社会的にマイナスのイメージでとらえられることを検討する。民俗学が明らかにしてきた多くの祭礼において反社会的勢力が関与し、祭礼の中核を担うことは珍しいことではない。台湾で八家将が低い評価を与えられるのは、それが本省人の台客文化の一部であり、外省人の支配構造においては周縁化されたためである。本省人の政権が教育、文化の側面にも変革を迫った後の時期を台客の第四世代とみなすならば、そこでは主流文化としての中華文化が常に本省文化を圧迫するという相互関係に変化が生まれるかもしれない。今後はこうした点に配慮しながら検討していく必要がある。

審査の結果の要旨

本論文は1940年代以降現在に至るまでの台湾の政治が民俗にもたらす影響に注目し、八家将の事例を検討して、本省人が担う台客文化を明らかにする。政治と民俗の相互関係を考察するために、前半では国民党政府の農業、教育、宗教方面の政策を統計資料や新聞資料を用いて検討し、後半ではそれらと関連付けながら具体的な祭礼の場での八家将の活動を検討している。現在観察できる多くのデータを動員し、現代民俗論としての体裁も整えている。国民党政府が支配者としてあらゆる面で本省人を圧迫し、八家将は台客文化を代表することから、これを通して圧迫の様相を明らかにできるとし、一貫した見方で論述を進めている。論旨は明確であるが、民俗の変化は必ずしもそうした政治的な側面だけから説明できるものではない。それは著者が台客文化を台湾中南部の本省人が保持している地域的な文化とする規定そのものにも表れている。台北のように都市化が進んだ地域、あるいは高雄のような工業化が進んだ地域は、都市化・工業化が変化の要因として考慮されるであろう。台客層を四世代に分けることはできるであろうが、第二世代で上部層と下部層に二分化し、その乖離が大きくなったものとして第三世代をとらえるとしても、上部層と下部層の間で揺れる人々も多いのではなからうか。事例分析にあたって、そうした可能性にも目配りが必要であろう。八家将成員の家庭的な背景についてもさらに詳細な検討をしなければ、先行研究の指摘を覆すには不十分である。しかし、反社会的集団とのやり取りや彼らの実態については記述しにくい場合もあり、それをもって、本論文の価値が下がるということではない。全体として十分な学術的貢献をしていると認められる。

平成25年1月22日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第10条(1)に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士(文学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。